

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

高校山岳部の活動と山岳保険を考える

来年度分から日山協に選手登録をした高校生の会費が無料となる日山協の共済保険の案内チラシが、全国高体連を通じて、手元に届いた。今年度もこの保険に加入していた学校には、すでに1月の段階で個人名の印字された継続加入申込書とともに詳細な案内が届いていたものである。ただ、今回届いたチラシで紹介されている保険はハイキングコースの高校向けなので、無雪期の一般縦走登山などや人工壁でのスポーツクライミングは保障の範囲内になるものの、アイゼン・ピッケルやロープを使用する登山は補償されない。日山協の山岳保険は、大きくハイキングコースと登山コースの二つのカテゴリーに分かれており、当然ながらリスクの度合いにより、掛け金も異なっており、全国事務局からの文書にもある通り、各校で一定レベル以上の山行をする場合は、登山コースに加入する必要がある。登山コースの加入や両者の比較をしてみたい向きは、日山協山岳共済事務センター（電話03-5958-3396）から別途要項を取り寄せて内容を確認してみしてほしい。電話をすればすぐに要項は送ってくれるはずだ。ちなみに、私の学校では従来から、ロープやアイゼン・ピッケルを使用した冬山や自然の岩場にも連れて行くので、保護者にも話をして掛け金はやや高いが、登山コースの保険に加入させている。ただし、登山コースには高校生向けにつくられた商品はないので、一般登山者向けのもの（当然高校生でも入れる）の中から選ぶことになる。

社会人山岳会などでは遭難事故は自分持ち、自己責任の原則から保険に入ることは当たり前であるというのが一般的で、最近個人でも入れる保険が登山用品店の店頭などでも紹介されるようになってきた。しかし、かつてはあまり入られていなかったし、現に高体連の加盟校などでは今でも無保険のまま登山をしている学校もあるのが現実ではないだろうか。保険料の高さがその一つのハードルになっていたのは否めないが、いったん事故が起こったときのことを考えれば、無保険登山など私には考えられない。まして生徒引率など恐ろしくてできない。

そんな中、日山協山岳共済の中に掛け金を低く抑えて加入しやすくした高校生向けの保険を企画、積極的に導入してくれたのは、前日山協会長田中文夫さんだった。2005年の千葉IHの時だったと記憶しているが、「今度高校生向けの保険を創設したのでぜひ多くの加入をお願いしたい」という田中さんの話があった。その折、僕は「長野では年間の半分以上（12月から5月）は雪上での登山になる。ピッケルやアイゼンやロープを使った登山ができないとなれば一年の半分は活動休止状態になってしまう。ぜひもう少し補償対象の広い保険を作してほしい」と要望を伝えた覚えがある。そのころの共済会パンフにも「いわゆる冬山やロッククライミングは対象にならない」ということが書かれていたが、共済会への問い合わせの中では、「残雪期や晩秋などにおける登山で最初から使う前提ではなく、用心のためにピッケルなどを持参する登山については対象になる」と回答していただいた記憶がある。だから、その後数年はその拡大解釈で冬山にも連れて行っていたが、数年経って改めて5月の針ノ木雪渓などに行く場合はどうか

と尋ねたところ、「そのようなケースは最初からピッケルアイゼンを使う登山にあたるので対象にできない」と共済会の回答が変わって来た。以来僕は、登山コースに加入させるようにしている。ただし、入院などの補償はつけていない。少し冷めた言い方になるが、クラブ活動中の怪我などについては、「日本体育・学校健康センター」からも一定の補償はあるし、元々命の値段は自分持ちである。山岳部のクラブ活動をする上でどうしても必要なのは、遭難時の救援費用ということになる。どんな活動をして、この部分をしっかり補償してもらえることがポイントだと思う。

そんなわけで、ぜひ日山協山岳共済会にお願いしたいことがある。それは、次世代の登山者を育成していくために、高校生向け保険について再検討をしてほしいということだ。きちんとした指導者がつき、まじめに山岳部活動を行おうとした時にはハイキングコースの補償範囲を超えた活動に踏み込まざるを得ないことは往々にしてある。そしてまた、高校生の時代にそういった経験を積むことが将来の山岳界を背負って立つ人材育成に大いに寄与することになると思うのである。そのために二つの考え方を提案したい。一つはハイキングコースの補償対象のある程度の拡大である。発足当初に対象とされていた残雪期や初冬の登山や、冬山でもそれほどリスクのない登山までカバーするものとするとはできないだろうか。その線引きは難しいだろうが、ある程度のモデルケースを示していただく中で対応は可能ではないかと思う。そして、今一つは、高校生向けにも登山コースの保険を創設することである。ハイキングコース同様登山コースにも、高校生向けの掛け金を抑えた保険商品を作ってほしいということである。いかがだろうか。

働きかけるにしても、今がそのチャンスであると思う。選手登録を義務化することと引き替えの条件として、会費の無料化が措置され、高体連あげて保険に入ることを薦める中で、これまで以上に保険加入する加盟校が増えてくるはずである。日山協の山岳共済はその名の通り、共済保険であるので加入数が増えることで、掛け金を抑えたり、意見を反映してもらったりすることが可能になるはずだ。そんなことで、一校でも多くの学校がこの保険に加入されることを希望したい。そして、その力をもって、上記の二つの考えを日山協に声として届けたいと思う。

ラッセル訓練の高杜山

3月9日、信高山岳会の例会で、高杜山に登って来た。同行者は重田（臼田高）、酒井（中野立志館高）、福島（中野西高）に小生の4名。高井富士とも呼ばれ、これまで、気にはなっていながら、登り残していた山の一つ。一昨日から本日の明け方まで降っていたという大量の雪が我々を歓迎してくれた。谷巖寺からの尾根道は3月とは思えないような新雪に覆われて思いがけず深雪のラッセルとなった。そうは言っても3月。登り



始めて暫くは登山シャツ一枚でも汗ばむほどの陽気。「冬型が強いと言ってもそれほどでもないね」などと軽口も飛び出したが、2時間半ほどのアルバイトで、稜線に出るとそんな雰囲気は一変。北風が吹き付け、まさに厳冬の装いだ。痩せ尾根の雪庇を踏み抜かないように注意をしながら、稜線を辿り、頂上に到着した。

眼下の中野市を一望し、下りはよませスキー場まで一気に下った。1400m足らずの標高、時期に比して、ハードな充実感のある登山だった。